

小学校における英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究

—中学校英語科教員の省察的語りに着目して—

和田 あずさ

1. 研究の背景と目的

小学校英語教育においては、これまで音声中心の指導と学習活動が行われてきた。そして現在に至るまで、英語指導経験も英語運用能力も様々な教員が指導に携わっている。他方、これまでの小学校英語教育研究の中心的な課題は、指導法や教材の効果についてであり、授業や教員の実相を捉えようとする研究は十分に行われてこなかった。しかし、授業実践とその背景にある授業者の心的過程を提示し解釈することで、他の教員は類似の経験や感情をもとに多様な実践知を得ることができる。そこで本発表では、小学校外国語活動の指導に携わった中学校英語科教員を事例とし、参与観察と継続的な省察によって導出された英語音声指導とその背景にある教師の信念の変容過程について報告する。なお、「教員」とは、教育職員、すなわち学校に所属し児童生徒の教育を行う教諭や講師を指し、教育に携わるものの総称としての「教師」とは区別する。

2. 先行研究

小学校英語教育に関する授業研究には、授業者の発話機能を分類しその特徴を明らかにした高木・粕谷（2013）の研究や、意味のあるやり取りや既習知の活用などを通して児童が日本語や英語で自由に発話できる授業を構成する教師の専門性の一端を明らかにした東條（2017）の研究が挙げられる。だが、いずれも1授業時間のみを対象とした研究であり、長期的な視点での研究や、授業者の省察も含めた詳細な考察が必要であると述べられている。このほか、他教科を対象としてはいるものの、参与観察とインタビューを併用し、小学校の授業における教育行為と信念との関連を明らかにした研究には、音楽専科教員を事例として授業の文脈に即した教師の思考過程と教育行為の選択について詳らかにした菅（2000）や、算数や生活の授業を事例として授業行為に表出する信念を描述した黒羽（1999；2005）などがある。これらは、授業者の省察を踏まえて授業行為を解釈した一方で、教師の熟達化の過程や信念の形成時期の解明、多様な事例の精緻な分析などの必要性を課題として見出した。

これらの先行研究に基づき、和田（2019a）および和田（2019b）では、教職歴や言語教師としての専門性の有無などが異なる教員を対象とし、参与観察と省察のインタビューを通して各々の授業実践と信念の関連と変容過程を導出した。その結果、英語の教員免許を有する新任教員の事例では、授業規律と児童理解に関する転機を経て、全体に対する音声の特徴に関する明示的指導と、クイズやペア形式などでの聞き取りと発音に関する活動を取り入れるようになるとともに、課題に対する改善や挑戦への積極的な姿勢がうかがえるようになったことが明らかになった。また、英語の教員免許を持たない熟達専科教員の事例では、新任教員にはない即興性として、児童の発音をほめたり、間違ってしまった時に励ましたり共感したりするなどの言葉かけが顕著であった。加えて、「学習に取り残される児童がいない授業をする」という根底的な信念が一貫しつつ、学習の積み重ねや継続を重視し、「分かる・できるようになる」ために明示的指導を取り入れるようになったという、実践の修正と再構成が確認された。しかし、英語音声指導に関する理論知・実践知の不足により、ALTの指導内容や教材への理解が必ずしも十分でなかったことや、指導方法の多様化に限界が見られたことから、教師としての熟達と言語教師としての熟達に隔たりがある可能性が示された。このような一連の研究を踏まえ、本発表では、英語の知識技能と教科指導歴を有し、教師としての経験も豊富である中堅中学校教員を事例とし、小学校英語教育において英語音声指導に携わる中で、授業者の信念と授業実践がどのように関連付きながら変容するかについて考察する。

3. 研究方法

まず、授業者の英語教育経験及び英語音声指導に関する信念を明らかにするために、授業者のライフストーリーに関するインタビューを行った。次に、実際の英語音声指導のあり方とその変容をとらえるために、2017年10月下旬から2018年3月にかけて、5、6年生各2学級計61授業時間の参与観察を行った。さらに、可能な限り授業後に授業者が自らの実践を省察する機会を設けた。ライフストーリーや省察のインタビューは、半構造化面接の形式をとり、簡潔なメモの作成とICレコーダーによる音声の記録を行った。また、参与観察では、フィールドノーツの作成とビデオカメラによる映像の記録に加え、補助的な記録としてICレコーダーによる音声の記録を行った。そして、これらのデータから作成した談話録を読み込み、感受概念を得るとともに、談話録の切片化とキーワード抽出を行ったうえで、典型的な授業内エピソードと省察的語りについて記述と解釈を行った。

なお、校長や授業者との協議により、筆者は研究者としての立場を観察当初に児童に明かしつつ、各授業の中

では、個別の児童の支援に加わることがあった。そのため、各教員にとっては観察者かつ参与者であり、児童にとっては大学から来たもう一人の英語の先生という立場であった。

4. 授業者の信念と指導の変容

(1) 授業者のライフストーリーと英語音声指導に関する信念

授業者は、講師歴を含めて教職歴 16 年の中学校英語教員である。幼少時をマレーシア、日本、フィリピンで過ごした帰国子女であり、帰国後も英語学習を継続して、大学で英語を専攻した。そして、一般企業で英語を用いる業務に従事した後、英国大学院への留学を経て教職に就き、ハンガリーの日本人学校に勤務したこともあった。

このように国内外で英語使用が身近な生活を過ごし、様々な母語訛りの英語に触れた経験から、授業者は英語の実用面を重視し、英語音声指導については、「発音が母語話者に近ければ通じやすいが、全くかけ離れていなければよいのではないか」、「ただし強勢の位置は重要である」という考えを持っていた。また、音声指導を行うための教材についても、学習内容の定着の方が重要であり、学習内容に関連付いた教材の選定や改良に労力を割くのは難しいことから、authentic なものより文部科学省作成のデジタル教材を活用することを支持していた。

(2) 指導の傾向

授業者の音声指導は、主に新出単語の導入と、音と文字のつながりに関する指導場面で特徴的であった。新出単語の導入では、初回は ALT に続いて単語を発音することを通して音のまとまりとして理解させ、2 回目以降の授業で英語として伝わらない発音を、カタカナ英語との英語の違いに言及しながら全体指導で修正するというルーティーンが観察された。例えば、5 年生で道案内の単元の単語練習時には、表 1 のような指導言があった。

表 1 場所を示す語句の発音に対する授業者の指導

単語	授業者の指導言
convenience store	「(単語間で連続する/s/を指して) ススじゃないよ、つなげていいよ」
restaurant	「(最後の) /t/は聞こえるか聞こえないか」
department store	「デパートじゃなくて、department store」 「ストアじゃなくて、舌を巻いて、store」

また、これらのほかに、/r/、/l/、/th/など、主に日本語にない音素の調音指導を行ったり、聞いたとおりに真似して発音する児童に「〇〇さん、いいね、上手だよ」と肯定的な評価を行ったりする様子も、2 回目以降の単語指導時に観察された。一方、音と文字のつながりについては、授業の導入時に「dot connection game」と「alphabet bingo」を継続的に取り入れていた。特に「alphabet bingo」では、はじめは「アルファベットの名前」でビンゴを行い、児童が活動に慣れると「アルファベットが持つ発音」を使用するようになった。どちらの活動でも、児童は授業者の指示に応じてアルファベットの太文字ないし小文字をビンゴシートに記入するのだが、「アルファベットの発音」で行うビンゴでは、ALT が「apple」「umbrella」「octopus」など、児童が音声で慣れ親しんだ単語を発音し、児童は語頭の音に対応するアルファベットを理解することが求められた。ここに挙げた例のように、児童にとっては音の違いや対応するアルファベットを区別しづらいものもあったが、活動を重ねるにしたがって、徐々に音素の違いを聞き分け、正しいアルファベットが分かるようになっていた。

(3) 省察の傾向

省察中の発言を月ごとに整理し、キーワード化したところ、全ての月において特徴的だったものは「分かること・できることの重視」、「児童全員」、「コミュニケーション活動の重視」、「学習意欲の重視」などであった。実際、どの月でも授業者が繰り返し言及していたのは、小学校段階での英語教育では、学習意欲や少しでも多くのコミュニケーションを行うことを大切にしており、コミュニケーション活動や自己表現活動では、発音よりも「話してみたい・言えるようになりたい」という意欲や話そうとする態度を重視している、ということであった。そして、そのために、「全員が分かること、できることを重視」し、「全員ができるようになるために、積み重ねや繰り返しを行うが、できていなければ中学校で一から指導する」と、授業者は度々語っていた。また、各学習活動の最終的な目標として発表を設定し、「できるようになる」ためにゲームやインタビュー活動を行ったと授業者は振り返っていた。そして、音声指導については、日付、曜日などの頻出語彙の調音や単元の基本表現の強勢とイントネーションは全体指導を行うが、特定単元でしか扱わないもの、児童の「言いたいこと」によって変わるものは、正確に発音できることではなく「聞いて分かる」ことや「より英語らしく話そうとする」ことを重視し

ているとのことだった。加えて、実際には様々な発音があり、欧米の発音がきれいというわけではないと度々指摘し、聞かせる時には正しい発音を大切にすることが、児童同士のやり取りや発表では、児童が自信を持って話していれば発音までは気にしない、という一貫した姿勢が省察の中で示されていた。

5. 総合考察

音声に関わる指導に一定の型やルーティーンが観察されたことと、個別の異なる省察にて同様の内容が繰り返し言及されていたことから、授業者の授業内行為と信念は、研究期間を通して安定していたと考えられる。これらの根底にあるのは、中学校での学習にも影響を与える児童学習意欲と、英語が苦手な児童も含めて、全員が「分かる・できる」ことである。ただし、授業者にとっての「分かる・できる」とは「聞いて理解できる」こと及び「発表時に自分が言いたいことが分かる・言える」ことである。コミュニケーションに対する意欲や態度を発音よりも重視する姿勢や、幼少期や留学時の経験に裏打ちされた「世界には様々な発音がある」という言葉からも、授業者にとって「分かる・できる」とは、必ずしも「児童が英語らしく発音できる」ことではないといえる。一方で、授業の中では、英語らしく発音しようとしているにもかかわらず実際の自分の発音が ALT のものとは異なることに気付いている児童と、無意識のうちにカタカナ発音になっている児童が混在していた。そのような状況において、単元の最終目標である発表やコミュニケーション活動に対して意欲的に取り組むことを優先しつつ、今後の学習との関連性も高い内容であり、児童の学習意欲の維持向上に関わる場面においては全体指導として音声指導を行う、という柔軟な姿勢が確立されていることが、授業内行為と省察の内容から推察される。

なお、「できなければ中学校で一から指導する」という言葉は、小学校外国語教育に対する否定的な捉え方を示すものではないと考えられる。省察の中で複数回発されたこの言葉について意図を尋ねたところ、授業者はまず、小学校では「言ってみよう」、「話してみよう」、「英語は楽しい」という経験を重視し、多様な活動の中で中学校の学習に資するものが少しでもあればよい、という認識であると語った。そして、生徒によって英語の学習経験や英語力に差があるのは小学校英語の導入前もこれからも変わらない、中学校ではできない生徒もできるように中学校でやるべき内容を指導すると答えた。これらのことから、「できなければ中学校で一から指導する」という言葉には、中学校教員としての自負と責任感が表れているととらえることができる。

6. まとめ

本発表の事例において、中堅英語科教員の信念と指導は大きく変容しなかった。英語や英語指導に関する知識技能や豊富な経験があることで、自らの授業方針を確立していた様子がうかがえた。他方、自らの指導について、「省察で振り返ったことを踏まえて、都度の授業において、児童の発音をよく聞き、修正できるようになった」とメタ認知していたことから、即興的・状況的思考と省察を繰り返すことでの授業改善という、「熟練教師の実践的思考」(佐藤・岩川・秋田 1990)の一端が明らかになった。今後は、より熟達した段階の教師にとって、信念と指導が大きく変容する場合に何が「揺さぶり」となるのかについて、研究を深める必要がある。

引用文献一覧

- 黒羽正見 (1999). 「授業行為に表出する『教師の信念』に関する事例研究—ある小学校教師の挿話的語りに着目して」『日本教科教育学会誌』 21, 27-34.
- 黒羽正見 (2005). 「学校教育における『教師の信念』研究の意義に関する事例研究—ある小学校教師の教育行為に焦点をあてて—」『富山大学研究論集』 8, 15-22.
- 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1990) 「教師の実践的思考様式に関する研究(1)—熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に—」『東京大学教育学部紀要』 30, pp.178-198.
- 菅裕 (2000). 「音楽教師の信念に関する研究—福島大学附属小学校における参与観察とインタビューをとおして—」『日本教科教育学会誌』 22, 65-74.
- 高木亜希子・粕谷恭子 (2013). 「小学校外国語活動における教師の働きかけ：公立小6年生の授業の発話分析から」『青山学院大学教育人間科学部紀要』 第4号, 119-131.
- 東條弘子 (2017). 「小学校外国語活動における教師と児童による知識構築過程—授業談話の分析と検討—」『宮崎大学教育学部紀要(教育科学)』 第89号, 1-10.
- 和田あずさ (2019a) 「初任専科教員の英語音声指導の変容：授業者の信念との関連に焦点をあてて—」『JES Journal』 19, 20-35.
- 和田あずさ (2019b) 「英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究—熟達小学校教員の省察的語りを手がかりに—」『JAIIA Journal』 5, 27-38.